

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前 文

「地理総合」(以下、本科目)は四つの大問で構成されている。各大問は四つの問いで構成され、全部で16の問いへの解答を要する形となっている。それとともに、本科目と並行して選択での受験を義務づけられている「歴史総合」若しくは「公共」における問いの数も同数である故に、合計32問の解答を要することになる。試験時間が2科目合わせて60分間である故に、1問2分弱の時間で解答をしなければならない。

問題の特徴として、地形図(地理院地図)や主題図、グラフや統計資料、模式図や写真、会話文など多岐に亘る資料が利用されるとともに、設問文も長い文章を伴うものがほとんどであり、それらを読み取り、理解するのに時間を費やすことになる。また、選択肢も長い文章で示されているものが散見され、更には、その組合せでの正誤の判断を要する問いが7と半分弱を占めるが故に、適切なものを吟味するための時間もかかることになる。以上のことを踏まえると、受験者にとっての負担は相当なものであったと考える。

出題内容については、第1問が「穀物の生産、消費」、第2問が「地域調査」、第3問が「日本の自然環境と防災」、第4問が「世界の生活文化の多様性」となっている。各大問とも本科目の内容B「国際理解と国際協力」の「(1)生活文化の多様性と国際理解」と「(2)地球的課題と国際協力」、内容C「持続可能な地域づくりと私たち」の「(1)自然環境と防災」と「(2)生活圏の調査と地域の展望」のいずれかが反映されたものになっている。以下、各大問を構成する問いの評価・分析結果について地理教育的観点に立脚した上で言及していきたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 (『地理総合、地理探究』と共通のため省略。)

第2問 (『地理総合、地理探究』と共通のため省略。)

第3問 日本の自然環境と防災に関する大問である。地形図・地図・陰影起伏図から人々の生活や災害の発生予測などを結びつける問いが出題されている。防災は「地理総合」の柱の一つであるが、実際の高校の現場で、限られた時間内にどこまで事例を出して展開できているかは、かなり差があるのが現状である。あらかじめ授業での説明があった上での出題であれば、良問が多いと感じるが、共通テストということを考えると、事例として授業で展開されたことのある地域に居住している学生が圧倒的に有利になる設問であると思われる。

問1 地形図上に建物の地図記号が集中しているのが、Cのみである。地形図の読図に関する基本的知識を問う、かなり平易な問題であるといえる。自然堤防の起伏を地形図から読み取することは難しいので、自然環境との関係を考えるのであれば、C以外を解答する問いの方が適当であると考えられる。

問2 河川・水路・水域の形状を示した図からその用途を導き出す問いであり、思考力と判断力が問われる。規模等をイメージしながら解答を導き出す必要があり、良問といえる。

問3 問題文にある関東大震災時の震度分布という表現に違和感がある。地震によってもたら

された被害が震災であるので、「関東地震（関東大震災）の震度分布」「関東大震災をもたらした地震の震度分布」などと表現すべきである。台風による風向きは変化するという知識と、図4から延焼方向と風向きが関係していることが結びつくなど、複数の要素から解答を導き出す必要があり、思考力と判断力が問われる。解答するまでに時間を要する良問といえる。

問4 大都市にある地下の貯水槽、山間部にある砂防堰堤、雲仙普賢岳の大火砕流跡地（大野木場小学校跡）の校舎の様子、河口堰の役割を問うものである。一度も説明を受けたことのない高校生が、貯水槽や火砕流跡地の写真から用途を想像することは難しいと思われる。地理総合の授業での知識から消去法で解くにしても、「地理総合」しか履修していない受験者にとっては厳しい問題だったと考えられるとともに、何より居住地により有利・不利が生じてしまう可能性が大きい問いであると思われる。

第4問 世界の生活文化の多様性に関する問題である。農業と食文化の関係性や、無形文化遺産、環境問題をテーマにした問いが並び、全体としてバランスがとれた設問といえる。

問1 任意の地点における気候、農業、食文化に関して正誤判定をさせる問題。やや抽象的な文章が並ぶものの、トウモロコシの栽培地域の特徴と利用法を理解していれば判定できたため、難易度は標準的であった。

問2 ユネスコの無形文化遺産に関する問題。写真と選択肢を組み合わせる形式だが、設問の写真の意図がやや伝わりにくく、戸惑った受験者もいたのではないかと。難易度は標準的といえる。

問3 世界の森林減少地域を示した図からその特徴を読み取らせる問題。マングローブの特徴については、既習の範囲であるため、正誤判定は容易だったのではないかと。

問4 世界各国における留学生の出身地域別割合を読み取らせる問題。留学先として主要な国が並び、それぞれの地域性なども明確に判定できるため、解答は比較的容易であったと考えられる。

3 総評・まとめ

全体的な難易度については、教科書で扱われている学習内容を逸脱することなく、知識・概念を手がかりに思考、判断のプロセスを追認するための情報処理能力（考察力、分析力、解釈力等）が試されるものとなっている。いわば、現行学習指導要領の求める資質・能力の主軸として位置づけられる「知識・技能」「思考・判断」が重視された共通テストに相応しい標準的なレベルの問題であったといえる。一方で、制限時間が短い中での解答が要求されているが故に、資料や問いの数を若干少なくしたり、設問文を短くしたりするなど受験者の負担を考慮に入れた対策を考えていく必要があるだろう。

総じて、多くの問いに見られたように、地図や統計、写真をはじめとするさまざまな資料から地理情報を読み取るためのスキルが重視されている。故に、高校現場においては、探究プロセスを重視した授業を今後更に心がけていく必要がある。すなわち、「知識・技能」をベースに「思考・判断」の過程を踏まえた地理的な見方・考え方の育成を重視した授業づくりが望まれてこよう。

4 今後の共通テストへの要望

新課程に基づく最初の共通テストとなった今回の試験は、教科書を中心に基礎的事項を学習し、地図帳で世界の概観をおさえ、資料集や統計データ等を用いてさまざまな種類の図表を読み取るためのトレーニングを地道に積み重ねた者にとっては、十分解答可能なレベルであったと考える。こ

のことに関連して、新課程のベースとなっている現行学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」を伴う探究プロセスが重視されている。このことは、知識・技能を基盤に、それを活用しながら思考力・判断力・表現力を育むための一連の学習の流れを重視することとイコールであるといえ、「地理総合」は学習指導要領の掲げる資質・能力育成の筆頭となるに相応しい科目として位置づけることができるだろう。

このことを踏まえるならば、今回の試験問題において、各大問は第2問を除き、それを構成する各問いどうしの関連性は乏しく、一つ一つが独立したものになっているように感じた。探究学習の流れを汲む試験問題であるならば、大問を構成する各問いが互いに有機的に関連し合い、課題解決のプロセスに沿って段階を踏んで解答を導き出していけるような形式であることが望ましいように思われる。

いずれにせよ、授業を含め日頃の学習で養われた物事に対する探究心と知的好奇心を大切にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の成果として身につけた地理的な見方・考え方を、現代的諸課題の解決や日常生活のさまざまな場面に生かすなど、地道にかつ丹念に学習に取り組んだ受験者の成果が最大限に発揮されるような「良問」の出題を今後も期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

TEL 03-5802-0201

1 前 文

平均点は、本試験と比較して『地理総合，地理探究』も「地理総合」も低くなったと思われる。追・再試験の『地理総合，地理探究』が本試験での出題であれば，55 点程度であった可能性もあるのではないだろうか。難易度の調整は慎重にお願いしたい。

全体としては，これまでのセンター試験や共通テスト同様，高等学校までの学習内容におおむね沿った問いが圧倒的に多く，学習範囲を逸脱した難問や奇問は見られなかった。また，詳細な事項を前提とするような問いも少なく，ほとんどの小問は，高等学校までの学習で身に付けた基礎的な事項をもとに，地理的技能や見方・考え方をを用いて考察するものであったが，『地理総合，地理探究』では解答に時間を要し正解率も低いであろう問いが数問見られた。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

『地理総合，地理探究』との共通問題は，『地理総合，地理探究』の方に記載。

大問構成は，第1問「地球的課題（食料問題）」，第2問「地域調査（愛媛県今治市）」，第3問「自然環境と防災」，第4問「生活文化」となり本試験と同様で，第1問の地球的課題が食料に関する大問という点も同様であった。

追・再試験においても，各問に図や表，写真などを含めた豊富な資料が提示され，それらの資料が提示されず設問文だけが提示された問いは16問の中には見られなかった。また，組合せ選択の問いが16問中7で，本試験の8よりも更に減少した。更に，正誤判定の問いが16問中5あり，組合せ選択でも正誤判定でもない問いは3であった。解答時間を要する組合せ選択の問いが減少したことは評価したい。

第3問 「日本の自然環境と防災」「自然環境と防災」に関する大問で，本試験と同じタイトルで出題された。新課程では旧課程と比較して防災がクローズアップされているとはいえ，災害との関わりに重点が傾きすぎていると感じる。人間と自然環境との相互依存関係は地理学習の基本であり，純粹に人と地形や気候などの自然との関わりについて考察させる作問が増加することを期待したい。難易度は低く，平均点の上昇のためには，本大問程度の水準の難易度でよいのではないか。

問1 小地形に関する定番の内容の易問。地形図，陰影起伏図ともに見やすく，典型的な問いとして学習場面でも生かせそうである。

問2 ダム湖やため池，水路といった水域が，周辺の地形や人間の生活への活用といった要因を受けてどのような形状を成すか，判断する問い。**ア**から山間部での侵食谷の地形，**ウ**から扇状地における扇頂から扇形に広がる地形が，それぞれ類推できれば正解を得られる。水資源の利用に関する標準的な難易度の問いで，工夫された問いとして評価したい。

問3 この問いでも陰影起伏図が用いられた。資料と下線部を相対させれば正解そのものは容易。

問4 防災施設に関する問い。可動堰は馴染みの薄い受験者もいたと思われるが，いずれの施設についても写真と下線部以外の文から判断でき，難易度は低い。

第4問 「世界の生活文化の多様性」生活文化についての大問。本試験のタイトルに「多様性」が追加されたものの、多文化主義に関する問いは見られず、各地の文化について淡々と出題された印象。本試験でも扱われなかった、自他の文化の尊重や国際理解を図ることの重要性に関わるような問いの作成を期待したい。

問1 気候が影響を与える農業と食文化についての問いで、平均点の上昇に資する易問。テーマや問い方的に第1問の問2との重なりが大きく、その点については改善をお願いしたい。

問2 ユネスコの無形文化遺産に関する問い。初見の無形文化遺産について写真から類推すれば、文との組合せを作るとは可能で標準的な難易度の問いであるが、この問いが求める知識や、解答に至る思考判断過程が地理的見方・考え方なのかは疑問が残る。写真とその説明中の下線部の正誤を判定するような問い方もあったのでは。

問3 マングローブ林の減少理由を問う文章選択問題で難易度は低い。多くの教科書で扱われている内容で、受験者にとっては安心して取り組める問題だったのでは。

問4 地理的な近接性と歴史的なつながりによる4か国の留学生出身地域の特徴に関する問いで、難易度は標準的。

3 総評・まとめ・要望

追・再試験においても、豊富な資料と組合せ選択の問いの多さなどにより、本試験と同様、解答に多くの時間を要し、見直す余裕は少なかったと思われる。初見の資料等に向き合い、それまでに身に付けた知識を活用してじっくりと思考判断して正解を得る過程は重要であるが、そうした問いが過度に多くならないよう、全体のバランスに配慮した作問を願いたい。今後もこの問数を維持するのであれば、解答時間が短くすむ問いを増やすなどの対応をお願いしたい。

仮に解答時間を要しても、基礎的な知識を前提に、資料を読み取りながら思考・判断するような問いの作成を継続するのであれば、設問数の検討も必要かと思われる。精選した設問数の中で、じっくりと思考判断するものが作成されることについての異存はない。

世界図を用いた問いは、「地理総合」で3問、第3問で冒頭に3問連続で用いられた『地理総合、地理探究』においても4問にすぎなかった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解したり、世界を大観する中で地域の特色を考察したりするという視点は重要であり、世界図を提示した中での問題作成の増加が望まれる。共通テストを通じて、地理を選択したことで世界の見方・考え方が深まったと受験者が感じられるような作問を期待する。

新課程の初年度となる今年度の追・再試験が終わり、早速来年度に向けた指導方法の検討が各所で行われていくはずである。地理受験についての特徴などを踏まえながら学習指導を行っていくにあたって、他教科他科目と比較しての得点分布や難易度、上位層の高得点の出しやすさは気になるところである。それらのバラツキが選択した科目間、本試験と追・再試験間で出ないよう、改めて調整をお願いしたい。